

2026.1.22



地域日本語支援ニュース こだま 第 463 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～



---

★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部： <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.htm>

---

■ともに生きる：神奈川県より■

インタビュー バブリ・アシュラフさん（アフガニスタン）

—母国の女性たちに希望を—

湧(わ)き水に恵まれた自然豊かな丹沢（たんざわ）山麓（さんろく）に、アフガニスタンの物産を販売する「アフガンサフラン」があります。バブリ・アシュラフさんはここを拠点（きよてん）に、母国アフガニスタンの豊かな文化を日本に伝え、同時に母国の女性の自立を支援し、両国の架け橋として奔走（ほんそう）しています。以下、バブリさんにインタビューした内容をまとめました。（実施日:2025年11月11日）

---

■「アフガンサフラン」の誕生まで

母国で公務員としてしばらく働いた後、2009年3月に日本に来ました。父が若いころ日本に留学していたので、日本にはずっと行ってみたいと思っていました。来日して、まず日本語学校で勉強しました。卒業後はタリバン政権になるまで駐日アフガニスタン大使館に勤務し、今もボランティアとして、続けて働いています（注1）。

大使館では文化紹介の仕事でいろいろな日本人とつながりができましたが、皆アフガニスタンのことを紛争地域としか考えていませんでした。古代からの文化があり、シルクロードが通る文明の十字路といわれる魅力ある国なの

に、それが全然知られていないのは残念。少しでも母国の良さを伝えられたらと思いました。

一方、アフガニスタンでは、アヘンの原料になるケシを栽培する農家が後（あと）を絶（た）たない状況でしたが、2001年に新しく誕生した政府の下で、これを打開するため、代わりに高品質のサフランを栽培するプロジェクトが始まりました（注2）。紛争で夫を亡くした農家の女性もおおぜいこのプロジェクトに雇用（こよう）され、自立して生活を送れるようになって、皆喜んでいたので。ところが、国際的な支援がなくなると販売も難しくなり、私が大使館に入ったころ、またケシの栽培に戻る農家が増えてきました。

私はサフラン栽培の応援をとおし、そこで働く女性たちも支援できないかと考えました。そこで、ちょうど来日していた女性省の人にその考えを伝えると、サフラン農家を紹介してくれました。サフランはアフガニスタンでは料理にもよく使われますが、サフランティーもとてもポピュラーです。

日本人になじみのあるカモミールなどをミックスしたオリジナルティーも考案し、大使館の仕事もしながら販売を始めました。

こうして、日本にアフガニスタンの良さを紹介し、アフガニスタンの女性や農家を支援する、というふたつの夢がつながり、「アフガンサフラン」が誕生したのです。アフガニスタンは人口の8割が農業に従事する農業国ですが、干ばつもあり、サフラン農家以外も苦しんでいました。それで、その後ドライフルーツの農家ともつながり、様々なドライフルーツも扱い始めまし。私たちはNPOではないけれど、農家に一番満足な値段で買い、農業機械も貸して応援しています。

#### ■タリバン政権下で始めたじゅうたん作り

2021年、再びタリバン政権になり、それまで外で公的な仕事についていた女性たちも皆、仕事ができなくなり、生活も不安定になりました。当時、銀行も閉じられ、お金を下ろすこともできず、国民は混乱していました。

私もどうしたらよいかわかりませんでした。とにかく女性たちが家の中でもできて、収入の得られる仕事とを考えました。まずはアフガニスタンのししゅうをしてもらい、それを日本で売ろうとしましたが、なかなか売れませんでした。でも、じゅうたんなら一枚作れば、家族みんなが一月食べられる。そこで、じゅうたん作りを始めたのです。作り手は元警察官、学校の先生、学生、公務員の女性たちで、ほとんどの人がじゅうたん作りは初めてでした。でも、プロの人もいっしょにいて教えてくれるので、仕事をしながら手に職をつけることができ、今は皆、幸せです。

アフガニスタンはじゅうたん作りの歴史が一番古い国のひとつです。国の中にいろいろな民族がいて、それぞれのじゅうたんの編み方や結び方、パターンや原料、色が違うので、そんな私たちの多様な文化も日本人に紹介したいと思っています。

#### ■新たに始めた寺子屋

今年になって、母国で寺子屋を始めました。名前は SABZ JAPAN【サブズ ジャパン】。サブズはアフガニスタンの国旗にも使われる「緑」という意味で、希望を象徴する色です。

今、アフガニスタンでは女の子たちが小学校までしか勉強できなくなってしまいました。それで、彼女たちのために自分に何ができるだろうと考えました。私一人で国中を背負うことはできないけれど、ひとりの支援からなら始められるんじゃないかと思いました。アフガニスタンの子ども一人、10ドル（約1500円）で1か月学ぶことができる。1500円だったら、コンビニでちょっと買い物して使ってしまう額でしょう。それで、どこからも支援をいただかず、自分ひとりで学校を作り、先生も頼みました。秋から週6日2時間、女の子20人が学び始めました。コーランの勉強をして、それに数学や国語、ほかに化学なども学んでいます。中学生以上で、高校生もいます。

来たい人はだれでも来られます。12歳なのに、児童労働のため今まで一度も学校に行ったことがなく、読み書きから始めたという子もいます。学年もレベルもいろいろだけれど、みんなで協力して、一緒に勉強しようとしているのです。

応援してくれる仲間もどんどん出てきました。何かしようと思ったとき、それを行動できる人、できない人、できてもやらない人、余計な仕事と思う人、いろいろいるかもしれません。私は自分の子どもだったらどうだろうと考える。私にも娘が二人いて、上は年生。その子が学校に行けなかったらどんなに苦しいか。現地の親も同じ気持ちだと思いますよ。あの子たちも私の子どもなんです。この地球に生きている私たちの次の世代なのだから、どういいう人を残すかは私たちの責任。そう感じながら今、やっています。それに「女性は家にいなさい」という社会なので、学校がなければ日本のように他に行く場所也没有。ずっと家にいると、うつ病になる子も多いのです。

私もこれまでの人生で、周りからたくさんものをいただきましたから、今はそろそろ、それを返す時期じゃないかと思うのです。自分の子どもや家族だけでなく、いつも社会にも目を向けていきたいです。それは母国だけで

なく、日本に対しても同じです。例えばドライフルーツの袋詰めを福祉(ふくし)作業所でやっていただいています。作業していただいて、ラベルが曲がっていたりすることもあるけれど、「ラベルが曲がっていたら買わないよ」というお客さんなら、買わなくてもいいという考えでいます。

私たちはアフガニスタンでも日本でも、どこでも、仕事ができない方たちをどういうふうに応援できるかと思いながらやっているんですよ。

### ■次のプロジェクトは!!!

9月から、この近く(丹沢山麓)で放置されていた元ミカン畑を開こんし、羊の牧場にするプロジェクトを始めました。毎日一人で木を切ったり草を刈ったりして、昨日はやっと羊が食べる草の種をまくことができました。

来年の4月にはもう羊がやってきます。中東やアフリカからロシアまで、古くからある羊の文化を日本に紹介したいし、ムスリムの人たちにハラル肉の提供もしたいと思っています。

私が一人で休閑地(きゅうかんち)を耕(たがや)しだしたら、近所のおじいさんやおばあさんたちも次々に、自分の土地も使ってほしいと言ってきました。この辺りも人手がないので、どんどん土地が荒れているのです。

いま、日本の国にお願いしたいことは、食物を輸入だけに頼るのではなく、少しでも農地を守って作物を作り続けてほしいということです。海外から輸入できなくなったとしたら、そのときになって農地に戻すにも時間がかかります。人間は車がなくても歩けばいいし、火がなくても木を燃やせばいいけれど、食べ物がないと暮らせない。洞窟(どうくつ)でも生活できるけれど、大きな家があっても食べ物がなかったら生きていけません。

### ■日本に住むアフガニスタン人

アフガニスタンの人が日本で生活し、仕事をするのに何が難しいかといえは、やはりことばと食文化です。

また、特に女性の中には、習慣などの違いから日本社会に溶け込むのが大変な人もいます。家庭にもよるでしょうが、社会に出ず、家に閉じこもりがちな女性も多いです。アフガニスタンでは、女性は家にいるべきだという昔からの考え方の人もまだ多くて、女性が社会に出てワクワクするようなことは、あまりいいとは思われません。日本語教室にしても、家事や育児で忙しいこともあるでしょうが、社会に出るのをはずかしがったり、アフガニスタン人同士のつながりを気にしたりして、来られない女性もあるでしょう。学

校に行ったことがない女性は学習の習慣がないので、その習慣をどうやって作っていくかですね。旦那（だんな）さんを理由にして出なかったりすることもあるから、旦那さんに理解してもらうことも大切です。スタッフや先生も、なるべく女性の方が安心するでしょうね。

#### ■自国の政変や紛争で日本に退避して来ている人たちへ

私も、来日して日本語がまだできない人には相談にのったり、友人にお願いして仕事を紹介してもらったりしていますが、今回の政変で来日したアフガニスタン人はもう半分以上、他の国に行ってしまったたり、国に帰ってしまいました。日本は家の準備やことばの学習など、いろいろ「自分でやりなさい」という部分も多いですから。でも、日本人はがんばっている人の背中を押してくれる人たちです。日本はいい国だから、ルールを守って、あきらめないで真面目にがんばってください。そうすれば絶対に生活できるようになると思います。

(2025年11月11日 アフガンサフランにて)

#### ——インタビューを終えて

寺子屋のお話をうかがっているとき、ちょうど現地で授業が終わり、先生たちからSNSで報告がありました。今日の授業の進み具合、生徒たちの様子を毎日報告してくれるそうで、みんな生き生きと熱心に学習している様子が伝わってきました。プロジェクトが順調に進み、子どもたちの未来に光がさすことを心から願っています。（編集委員 小瀧）

(注1) アフガニスタン大使館はタリバンが復権する前の旧政権の大使館として、本インタビュー時も含め、これまで業務を続けてきました。

しかしながら2026年1月末で事実上閉鎖されることになりました。

(出典) NHK ニュース 2025年12月28日

<https://news.web.nhk/newsweb/na/na-k10015015951000>

(注2) 1996年にはイスラム原理主義のタリバンが首都カブールに政権を樹立しましたが、2001年、米国主導の介入によりこれが崩壊し、国際支援の下で共和国体制が敷かれました。しかし情勢はその後も不安定なままでした。2021年には外国軍の撤退を受け、タリバンが再び国土を掌握し、今に至っています。

---